

ながさきの空 発刊三百号記念 戦後の長崎学創立のころ

越中 哲也

一昨日、事務局より「ながさきの空 第一号」を発刊してより今回は三百号となるので、私に何か記念誌を書くようにとの事であった。私が故清島省三十八銀行頭取より、「あなたの言う『長崎学』を学園内での講義のみでなく、一般の人達にも解りやすく説明普及する目的で、長崎歴史文化協会を設立するように」と言われたので、今より二十五年前の昭和五十七年五月二十八日に創立して戴く運びとなった。本稿では其の『長崎学』創立の事などを中心に紹介してみたいと考えている。

前長崎県立図書館長の永島正一先生は、其の著「長崎ものしり手帳」(一)の中で、長崎高等商業学校教授であられた武藤長蔵先生、長崎県立図書館長永山時英先生と古賀十二郎先生を「長崎学の三羽鳥」とよび、中でも明治十二年五月長崎五島町の前黒田藩長崎屋敷用達「万屋」の十二代として生まれられた古賀先生を「長崎学の泰斗」とよんでおられる。

戦後は、古賀先生お一人だけが郷土史家として残っておられた。当時、先生は大村に疎開しておられたので、永島先生が中心になって時々、先生を長崎県立図書館にお迎えして、「長崎学会」という会合を開いていた。



中国旅行を楽しむ歴文協会員（福健省・黄槩山にて）

しかし今考えると当時集まって来られた人達も、今では皆亡くなってしまわれた。当時の大先達としては、古賀先生第一のお弟子さんと言われていた渡辺庫輔先生、長崎大学の小澤敏久、外山三郎の両先生、キリシタン研究家の片岡弥吉先生、長崎市立博物館の林源吉、島内八郎の両先生、面白い事を自由に話される正木慶文医博、図書館よりは田中享一先生と松尾利信(後の稲佐幼稚園長)先生、若い研究者として中西啓、田中敏朗の各氏と私であった。其の後少し遅れて参加して下さった人に、「犯科帳」出版で有名になられた森永

氏の「長崎年表」にあったと知り、永島兄が「金井俊行の伝記を読みなさい」と言われた事が理解された。そう言われてみると私が勤めていた長崎市立博物館の書庫の中に、朱印で「長崎区役所」と押された古記録が箱の中にあつた事を思い出す。あれはたしかに明治二十二年四月長崎市発足以前、明治十九年八月以降金井俊行区長時代に収集された資料であつた。

さて長崎年表を取り出してみると第一の序文は長崎聖堂の長川政徳、第二は西道仙、第三は俊行の自序、ついで「長崎年表凡例」とあり、其の凡例の中に重要なことが記してある。先に私が疑問に思つた唐船の事を明確に次のように三つに区分して記してあつた。

唐船には三類ある事。一、口港より来る船(口船)とは南京・寧波・普陀山・厦門・台湾・広東。

二、中奥港より来る船(中奥船)温州・舟山・福州・漳州・東京・東埔寨。

三、奥港より来る舟(奥船)広南・占城・暹羅・咬囉吧・太泥・六毘・滿刺加・柔佛・宋居勝・萬丹等

シッポクの語源はやはり唐船(中奥船)で、ジャンクの型の船を全て唐船として長崎奉行は扱っていた。そこで唐通事の中にも一般の中国語通事と区別して一・しやむろ通事、一・ろすん通事、一・東京通事等がいた事が知られる。

又同書には「地役人」を次のように説明している。「其の役料銀は受用銀と云う、兼役の場合は加役料という。」

「御切米」とは「老中の證書あるものへの給米なり。」「一般の給米」は長崎会所買入米より給す。「扶持米」には二種あり、一は老中證書によるもの、会所買入米より給するもの。「手当銀」は特別給与と退職者の恩給。「助成」とは救助に出すもの也。

次に長崎で言う「箇所持町人」とは宅地を有し平民で苗字を唱う。其の他の戸主を「籠主」とよぶ。年表一・二巻は「長崎之起原」に始まり慶応三年十二月で終り。年表三は神社佛閣・橋・町・鄉村名・奉行代官・町年寄沿革・地役人表・長崎会所歳計・外国商法・異宗處分で終つている。

明治二十一年九月六日出版・著述者 金井俊行・発行者 佐々澄治・印刷者 七里眞・発注所 本博多町以文会社

種夫先生、そして最後に、此の長崎学会が解散するまで、惜しみなく一切の経済的援助を戴いた増田水産社長の増田高彦氏の名も忘れてはならない人物であられる。

私の長崎学

私が長崎学に興味を持ち始めたのは、或る日「チャンポン」の項をよんでいたら、「チャンポンは始め唐船持ちきたる料理なり」と書いてあつて、「其の唐船は東京の船なり」と説明してあつた。東京といえば今のベトナムであり、そのベトナムの船が、どうして唐船と呼ばれるのであるうかと疑問を持ったのが、最初であつた。

早速、この疑問を渡辺先生にお尋ねしたら「それは金井俊行の長崎年表の序文を読んだら解るよ」と言われた。金井年表は明治二十一年の発刊本で、一般にはなかつたので県立図書館に行つて永島兄に見せて戴いた。其の時、永島兄から「此の本を読むなら、編者の金井俊行の事にも興味を持って研究すると長崎の歴史は良くなるよ」と助言を戴いた。

金井俊行一初代長崎区長 明治二十一年、長崎の街に初めて水道敷設の議を起こす。時に此の案に反対する運動おこり、翌明治二十二年四月より実施された長崎市長選にやぶる。然し水道工事は、明治二十四年五月完成、給水を開始している。又、俊行の父金井八朗は、長崎代官所御用掛手代で西山郷に住まい『金井八朗備考録』を残している。俊行自身、長崎聖堂の教導・長川幹二について和洋の学を習い、少年の頃より代官所に出仕、明治維新後は、時政を知る人として明治十六年には大書記官となり、従六位に進んでいる。其の伝記には、次のように記してある。

俊行 常に長崎には其の歴史を完備したるもの無し、餘暇あれば府庫を検し史書を涉獵し、刻苦数年、明治二十一年 散逸せる史書を区役所に集輯し 後世史家をして倚る所を知らしむるため長崎年表三巻を著す 明治三十年八月歿す 年四十七 西山椿原の墓地に葬す 此処まで来た時、私は古賀十二郎先生が言われた長崎学の基点は金井

風信

○最近の話題は「口は禍の元」と言われる。お互いに注意して発言せねばならぬ事が多いようですね。

○七月二日、国土交通省長崎道路管理課小野課長濱田専門官来訪あり。今年度の「道の記念日行事」として、今年は八月十八日(土) 佐世保方面見学を企画して戴きたいとの由。参加希望者は歴史文化協会事務局まで御問い合わせ下さい。

○七月三日長崎県民謡協会代表本多由朗・平川淨両氏来訪、恒例の「長崎県十九回民謡コンクール」を七月十五日(日) 平和会館講堂で開催するので御出席をと言う御案内であつた。その出演者は県内外より百数名。午前十時より午後五時までの大熱演、今年も大盛況でした。

○七月七日、電話あり「七夕」と書いてどうして「タナバタ」と読むのですかと質問あり、回答。

○七月十七日、同じく質問あり。京都八坂神社の祭礼をどうして「ギオン山笠」と言うのですか。ギオンとは佛教の言葉で「祇園精舎の鐘の聲」と習つたのですが、「八坂神社はお寺です」と言われる。

○八月に入ると「オボン」になる。オボンと言うのは佛教の言葉で其の源語は古代インド語(Sanskrit)のOvalambanu-Ulambanaで中国で之を盂蘭盆会と訳している。言葉の意味は「逆さに吊す」とあるので「苦しみ悶える」と言う事である。その故に、其の苦しみを佛様に救ってもらう日を中国では、中元の日(旧七月十五日)としたので、其の行事が我が国にも佛教伝来と伝えられた。我が国で最初の「盆会」の記録としては、齊明天皇三年(六五七) 七月十五日、奈良明日香村飛鳥寺の西に須弥山を造り供養したとある。

○長崎の「お盆の行事」は、キリスト教が廃された寛永時代以後(一六二四年)主として、筑後(柳川) 方面より進出してきた浄土系の人達を中心に、お盆の行事が発展し、それに唐船の人達より伝えられた清明の行事(墓前の飲食・花火)や、彩舟流の行事の影響をうけ、現在みるような「精霊流し」の光景となった。

○今では殆ど忘れ去られているが、文化五年(一八〇八) 八月十五日は、イギリスの軍艦フェトン号が長崎港に侵入し、色々の事があり、其の責めを一身にうけとめた長崎奉行松平図書頭が切腹して果てた日である。図書頭の墓は大音寺本堂横にあり、長崎市文化財(史跡)に指定されている。

